



Title	ポストモダン作家 Margaret Atwoodによる歴史小説
Author(s)	松浦, 菜摘
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 8, p. 31-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92601
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポストモダン作家 Margaret Atwood による歴史小説

英米文学 博士前期課程 2 年

松浦 菜摘

はじめに

Margaret Atwood は、カナダ出身のポストモダン作家である。彼女の創作活動は多岐にわたり、小説だけでなく詩、エッセイ、絵にまで及ぶ。フェミニズム作家と呼ばれることの多い Atwood だが、彼女の作品は単に女性性のみにフォーカスを当てているのではなく、他にも多くの Atwood の物語世界を結びつける内容・形式両面にわたる諸要素を兼ね備えている。その要素のひとつが歴史性である。本発表では、数多の作品の中から彼女の代表作と目される『侍女の物語』(*The Handmaid's Tale*, 1985 年)¹を選び、その歴史性を拾い上げる。さらに、この続編の『誓願』(*The Testaments*, 2019 年)²にも目を向け、これらを「歴史小説」と呼ぶことができるのかについても考察を加える。

そもそも、Atwood の生きるポストモダンの時代においては、客観的に真実を表象することは不可能であるという一種の諦念のような感覚が作家たちに共有されているといえる。Jameson 曰くこうしたポストモダニズムにおける歴史性とは、プラトンの洞窟の例えのように、壁の上に映し出された過去の心象の影をなぞるものである³。つまり、我々はその「影」から歴史を求めることを余儀なくされており、そこに見出したものを文化的に生産することによってしか歴史記述ができないというのである。このように、あくまで真実に辿り着けないという態度がポストモダニズム文学の前提として存在するのである。ここで、Hutcheon による歴史記述的メタフィクション

(historiographic metafiction) の概念も参照して考えてみると、ポストモダニズムは、「出来事」(events、それ自体は意味を持たない)と「事実」(facts、意味を持っている)の峻別を執拗に強調する傾向を持っていることがわかる。この両者の違いは、White が「事実は与えられるものではなく、出来事に対してどのような問いを立

¹ Atwood, Margaret. *The Handmaid's Tale*. Houghton Mifflin Harcourt, 1986.(『侍女の物語』斎藤英治訳、新潮社、1990 年。)

² ---. *The Testaments*. McClelland & Stewart, 2019. (『誓願』鴻巣友季子訳、早川書房、2020 年。)

³ Jameson, Fredric. *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. Duke University Press, 1991. p. 28.

てるかによって構築されるのである」⁴と説明したとおりである。Hutcheonはこの峻別を踏まえた上で、歴史記述的メタフィクションでは過去に関する歴史的な知識は意味論的に伝達されるとした。「事実」とは、歴史の中の観客であると同時に為手である我々が、過去の史料の権威や客観性を強調したり失わせたりして作るということである⁵。このように歴史記述的メタフィクションは、真実の表象不可能性を前にして、現在の文脈や視点を意識することで過去を再構築することに新たな可能性を見出すのである。

これまで『侍女』とその続編『誓願』はもっぱらフェミニズム SF (speculative fiction) と評されてきた。それはディストピア社会を舞台に女性の抑圧を一人称体で描いているからであり、Atwood 自身も“I wanted to try a dystopia from the female point of view—the world according to Julia, as it were.”⁶と述べていることにも表れている。そして時としてグロテスクなまでの過激さをもって社会が描かれているために SF と呼ばれるのだが、Atwood 本人は空想や非現実ではなく、実際に起こったことやこれから起こり得ることを書いているのだと言う⁷⁸⁹。これらのことを踏まえ、以下でこの 2 作品の歴史性を論じる。

第 1 章 時間意識

『侍女』は、George Orwell による『1984 年』(1984、1949 年)¹⁰を下敷きとしている。Atwood が『1984 年』を模倣しているのは内容のみではない。全体を二部に分け、前半の一人称語りを後半部分で相対化している構成も共通している。Thomas Pynchon は『1984 年』の後半部分(作品内で用いられる言語についての附録という体裁をとっている)について、それが一貫して過去形で書かれていることなどに注目した。そしてこれにより、匿名の筆者が作中の未来において、前半部分で描かれた社会を批判しているものであるという可能性を提示した。Atwood は Pynchon のこの指

⁴ White, Hayden. *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism*. Johns Hopkins University Press, 1978. p. 43.

⁵ Hutcheon, Linda. *A Poetics of Postmodernism: History, Theory, Fiction*. Routledge, 1988. p. 123.

⁶ Atwood, Margaret. *In Other Worlds: SF and the Human Imagination*. Virago, 2011. p. 146. 第 1 章の冒頭でも述べるように、『侍女』は『1984 年』がベースとなっており、Julia はその中の登場人物である。

⁷ Rothstein, Mervyn. “No Balm in Gilead for Margaret Atwood”, *The New York Times*, 1986.

⁸ Tolan, Fiona. “Feminist utopias and questions of liberty: Margaret Atwood’s *The Handmaid’s Tale* as critique of second wave feminism” *Woman: A Cultural Review*, 16:1, 2005, pp. 18-32.

⁹ Staels, Hilde. “Margaret Atwood’s *The Handmaid’s Tale*: Resistance through narrating” *English Studies*, 76:5, 1995, pp. 455-467.

¹⁰ Orwell, George. *1984*. Secker & Warburg, 1949.

摘を踏まえて『侍女』の後半部分を書いたと思われる。**Historical Notes** と題されたそれは前半部分より約 150 年後の歴史学会のシンポジウムを舞台として、前半の一人称語りが実は録音された音声史料だったと読者に悟らせるものになっている。この分化された構成によって、両物語の中に時間的な隔たりが生まれているのである。続いて『誓願』では、『侍女』において語り手であった女性の娘が主人公となっている点から、この 2 作品間にも 30～40 年程度の時間的隔たりがあることが窺える。

Historical Notes は議事録という形をとっているため、一貫して全て一人称で書かれていることになる。それによって読者は書かれた全ての時代であたかも自分がその場を経験しているように感じるのである。しかし実際は断絶した時間的な隔たりがあるため、その揺れ動く視線が歴史の直線を作ることになる。語り手が伝えた「出来事」を読者が「事実」とすることによってその直線を作り出すのである。

さらに、物語の外にも時間的な距離は広がっている。『侍女』で描かれている政治的な出来事は、実際に過去にあった歴史的事象がもとになっているのである。キリスト教原理主義者によるテロや、フェミニズム運動の高まりとそのバックラッシュなどにくわえ、着用が強制される中世的な服装に至るまで、緻密に時間の糸が張り巡らされている。このようにアトウッドは、作品の中に連続しない時間的隔たりを設けることで、「歴史」を作り出しているといえる。

第 2 章 信頼

前章で説明したように、『侍女』の前半の一人称語りは実はカセットテープに吹き込まれた音声である。抑圧された社会で縫るように一人語る主人公が、その中で聞き手の存在を想定したような話し方を展開する部分がある。前半部分で描かれる世界では基本的に文字が禁止されていることもあり、その語りは怪しくもあるが、そこで一人称体の **I** が次第に複数の **we** に変化していく様は明らかに人と人をつなぎつける連帯意識を感じさせる。そうして語り手はテープを発見する未来の誰かに希望を託すのだが、実際に未来のシンポジウムでは変わらず女性蔑視発言を受けることになる。ここでもなお、あくまで史料としての重要性が説かれるのみで、語り手の主体性は蔑ろにされたままなのである。つまり語り手が想定した聞き手はそこには存在しなかったということになる。続く『誓願』でも、同様に語り手が読者に語りかける部分がある。それは手稿の体をとっているため音声ではないのだが、やはり後世に発見されることを想定した書きぶりである。

聞き手に対して『侍女』では “I tell, therefore you are.” (268) と語り手が言う。読み手に対して『誓願』では “I hover behind you, peering over your shoulder: your muse, your unseen inspiration, urging you on.” (403) と言う。一方的に話をするというわけではなく、「語り合うことでお互いの存在を可能にする」という語り手と読者の相互的な関係がここに見えるのである。特に『侍女』ではシンポジウムでそのコミ

コミュニケーションが失敗しているため、読者はより強く連帯感を感じるであろう。

第1章で述べた「歴史」を可能にするのは、この語り手の読者への語りかけにあるともいえる。関係が相互的であるために、語り手が話した/書いた時点とそれに対する読者の反応が生まれる時点とで時間的隔たりが生まれるからである。それは公的資料よりも個人の語りを優先する、信頼によって成り立った新しい「歴史」観である。

おわりに

『侍女の物語』と『誓願』における Atwood の時間意識および読者との信頼関係について見てきた。一見すると信頼できない語り手とするに相応しい主人公であるが、語りかけによって読者はその主人公と対峙せざるを得なくなる。彼女たちと対話し、信頼関係を築き、「事実」を共有してともに同じ視点から過去を見ることで、読者は歴史構築の共犯者となるのである。これには一人称語りが関係しているところも大きい。が、そもそも歴史構築は時間的な幅が存在することによって初めて成り立つ。Atwood が用意したその時間のゆりかごの中で、語り手に導かれて過去への眼差しが作られていくのである。

よって『侍女の物語』と『誓願』は歴史を扱った歴史小説ということもできるが、読者を歴史構築のプロセスに巻き込む能動的な装置を内包した物語であるともいえる。換言すれば、これこそ Atwood なりのポストモダニズムの発露であり、つまり歴史記述的メタフィクションの一種であると結論づけてもよいだろう。